資料渉猟余話

その114

歌誌『夕樺』とその周辺 1

清水迪夫

戦前の大正期、ここ下伊那の地に全国に先駆ける民主的な青年運動があったことは今ここ地元の人々からも忘れ去られようとしている。この下伊那青年運動と短歌雑誌『夕樺』の間には実は深いつながりがある。

この秋南信州資料センターから下伊那郡単位の最初の青年会組織『下伊那青年会』の機関誌『伊那青年』(明治三十三年二月～明治三十六年二月、全三十八冊)の復刻版が全巻出版された。現在同センターではそれに続いて大正デモクラシー期の青年たちの歌誌『夕樺』の発掘、刊行にむけて取り組んでいる。先日第二巻八号(大正十一年九月発刊)が見つかった(写真1)、まだ第二巻の多くが見つけられておらず全巻まではそろっていない。

歌誌『夕樺』が創刊されるまでの下伊那の歌壇状況を当時の歌人たちを知る意味でも概略を記しておこう。大正デモクラシー期それまで文学界の主流であった自然主義にかわって白樺派を中心とする自由主義、人道主義の思潮が全国にひろがり、長野県でもこれに共鳴する若い教師たちによって、児童の自主性を重んじ、旧来の殻を破る教育活動、自由教育が行われた。歌誌『白樺』の読者は山国信州が東京に次ぐ読者を持っていた。下伊那でも自由教育を求める若い教師や青年たちによって中央の短歌、俳句の雑誌である『白樺』のほか『ホトトギス』『アララギ』が読まれ多くの短歌会が作られた。『白樺』は武者小路実篤、志賀直哉、有島一郎らによって創刊された短歌雑誌であり、『ホトトギス』は正岡子規のあと高浜虚子が継承し、夏目漱石らが投稿している俳句雑誌である。『アララギ』は正岡子規没後門人によって創刊、伊藤左千夫、斎藤茂吉、島木赤彦らによって編集され、大正・昭和を通じて歌壇の主流をなした(写真2)。

〈写真1〉『夕樺』第二巻第八号(表紙、須山計一)

〈写真2〉『アララギ』創刊号(表紙)

下伊那における最初の短歌会は明治三十四年の「若菜会」である。若菜会は同年一月、近藤政寛(赤嶺)、桃沢茂春、北原阿智之助(痴山)、林譲などが回覧誌『和可那加古』(三号から『和加菜』、その後『若菜』と改題)を発刊した。明治四十年に若い教師たち、前沢政雄(溯月)、菅沼直衛(千夜)、高坂隆次(竜渓)らによって「潮会」という歌会がつくられ、はじめは『潮』という雑誌をつくっていた。のちに先の若菜会の近藤、平沢二郎(静濤)、神波二男(糠袋)、岩崎清美(雨村)、長谷川喬村、宮崎茂(星川)らが加わる。下伊那の短歌運動に大きな影響を与えた長谷川喬村については編纂村沢武夫『伊那谷の文化と長谷川喬村』に詳しい。

大正期に入ると、中央の短歌会盛況の影響をうけて若い教師(新井白雨、宮崎茂、松沢茂三、宮下操ら)と青年たちによってあいついで歌集が発刊されていった。坂井喜三(晶山)、丸山東一(冷果)、原貴男(梨村)、新井不二彦(白雨)らによって『メバヱ』が、宮崎茂、青山榛三郎、大井広、南山紫水、平沢一義(一水)らによって『山河』が発刊された。当時竜丘小学校の教師の間で歌誌『ポプラ』が作られており、それに村の青年たち、岡村二一(笛人)、中田美穂(落穂)、岡村誠一(夢人)らが参加している。大正九年になると原清(紅果)、今村邦夫、岡村二一、関谷桑之助(峡村)らによって『峡』が発刊された。文学活動は短歌だけではなく、大正九年に関谷桑之助が『東雲』、熊谷寛が『失名』という文芸雑誌を、竹村浩が『王冠』、今村邦夫が『ものの生命』の回覧雑誌を出している。(佐々木敏二『下伊那社会主義運動史』)このような個人的活動の分散状況にあって歌人たちがまとまった歌誌を発行しようとの話がもちあがり、大正九年秋に集まった。場所は岡村二一の勤めていた大久保小学校の宿直室と今村邦夫の勤務している伊那銀行であった。

大正十年一月一日、短歌雑誌『夕樺』が創刊された。奇しくもこの年は「下伊那郡青年会」(郡青)が、二月今までの官製青年会から「ただかう」青年会へと脱皮して自主化を勝ちとった年であった。

創刊号の奥付を見ると編集人岡村笛人、印刷所飯田印刷舎、発行所夕樺社となっている。「清規」(規約)は毎月一回発行、社費として一か月二十銭、原稿送り先、その他照会は伊那銀行内今村邦夫となっている。創刊当時の同人は岡村二一、今村邦夫、羽生三七、中田美穂、桑原郡治、阿部静波、吉川秀穂らであり、『夕樺』の命名者は岡村二一(石川真澄『ある社会主義者』)で歌人たちの『白樺』の人道主義、自由主義への傾倒が感じられる。

『夕樺』の創刊から編集、投稿、廃刊にいたる最後まで最も深くかかわった岡村二一は、創刊号の「雪解くる夜に」のなかで期待と意気込みを次のように書いている。

「雪解くる夜に」

淋しい淋しい人生の旅にあって、私達にわづかに生命の微笑をもたらして呉れるものはまことにこの歌だけである。

歌か私か、私か歌か、とにあれ歌は私達の生命である、私は生命を熱愛する。歌を熱愛する。…あゝいい歌を作りたい。唯それだけだ。一首でもいゝ。たった一句でも構わない。本当にいい歌を作りたい。…行こう、行こう、苦しくとも悩しくとも、お互ひに心の手を取り合って、遠い死に至るまで…。

涯てしもない歌の巡礼よ。

教師でもあった岡村は創刊号投稿短歌の中で、「教え児」と題して次のように詠っている。

身の罪をことごとく言ひてくづれをれし子を抱きしめて言葉も出でず

言たえて手を取りしまゝ泣きゐたり

璃璃戸にもゆる夕焼けの色

身に迫る悔ひに泣く子よこの後は心をこめてよき人となれ

(続)